人・獣骨類の出土した大溝

― 朝日西遺跡59C・D区ＳＤ11の紹介 ―

江原昭善*・松本　真**・木下　実***・遠藤才丈・小澤一弘

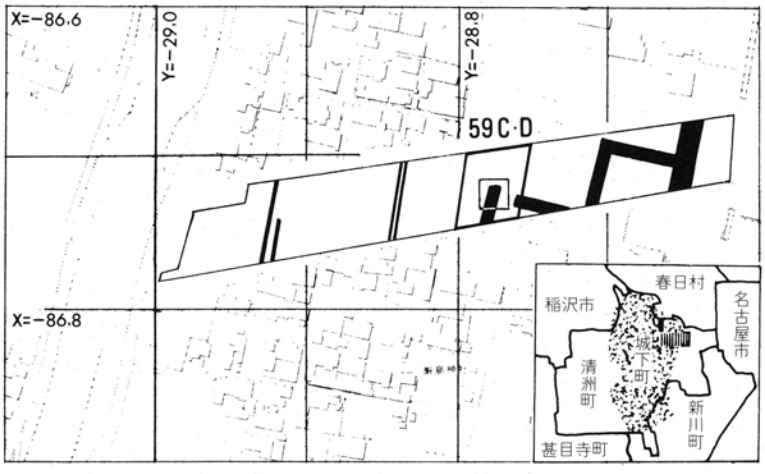
Ⅰ　ＳＤ11について

1．遺構の位置と出土状態

昭和59年12月、環状２号線予定地内の朝日西遺跡59C・D区において、多数の人骨と犬骨が、他の遺物群とともに大溝より検出された（図版Ⅰ）。これらの資料は、近世初頭の興味ある精神生活の一端を垣間見せており、人骨等の鑑定結果とともにここに紹介し、あわせて先学の御教示を仰ぐ次第である。

人・獣骨類の出土した大溝ＳＤ11は、屋敷地を画する溝の一つで、清洲城下町の東北端に展開した寺社地における溝群のなかでもっとも西側に位置する（第１図）。南北方向に外堀と併走し、幅７ｍ、深さ0.8ｍ、長さ17ｍ程の規模であるが、なお調査区外へと南走している。

遺物群は、この溝の東北側に大小の群塊状態で検出され、いづれも溝の下層に安定的に堆積した黒褐色土～暗緑灰色粘質土層中より出土している。出土骨については、人骨も犬骨も、まったく解剖学的配列を示さず、かつ混然とした状態で出土している。しかも、第１表

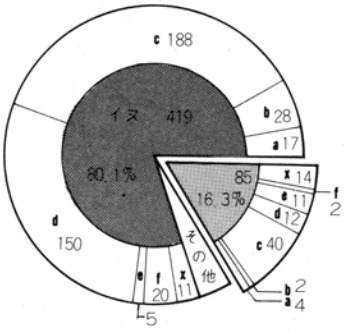


第１図　ＳＤ11位置図

＊　京都大学霊長類研究所教授　　執筆分担（Ⅱ）
＊＊　京都大学霊長類研究所研修員　　〃
＊＊＊　京都大学霊長類研究所技官　　〃

に見る如く特定の骨種に限定されているのである。いづれにせよ、出土状況は、あるまとまりをもって、溝の東肩より次々に投棄されたことを示しているであろう。

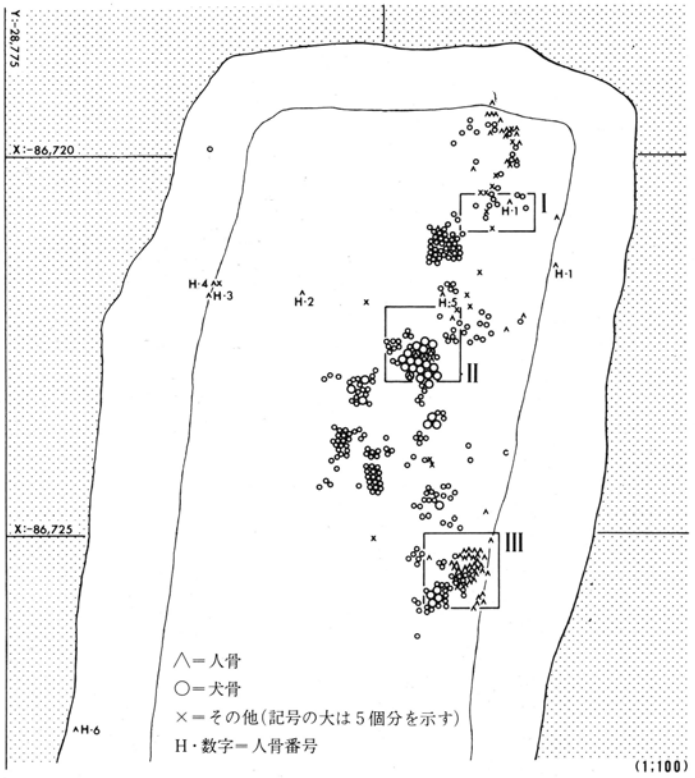
こうした遺物群の投棄された時期は、溝が機能していた時期とは考え難く、溝の廃絶時、即ち「清須越」の始まる慶長15年（1610）前後のことと思われる。



a＝頭骨
b＝下顎骨
c＝肋骨
d＝椎骨
e＝四肢骨
f＝寛骨
x＝その他
（数字は個数を表す）

第1表　人・獣骨類種別構成

（下顎骨は頭骨の一部だが、本論では別に扱った。）

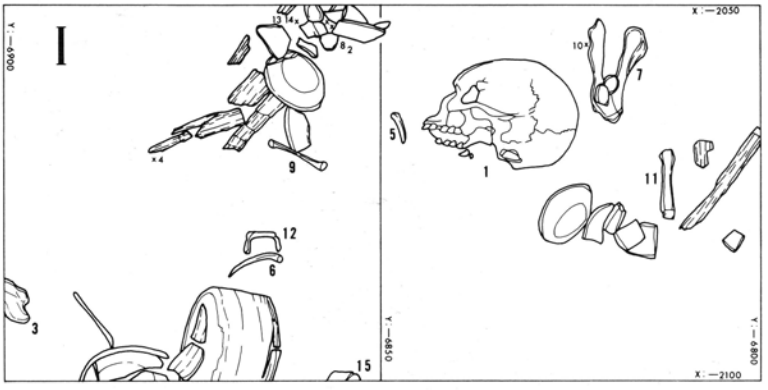


第2図　人・獣骨類出土分布図

ヒト　頭骨　1

イヌ　頭骨　2
下顎骨　3
肋骨　4～6
寛骨　7・8
上腕骨　9
尺骨　10
脛骨　11

カメ　12～15

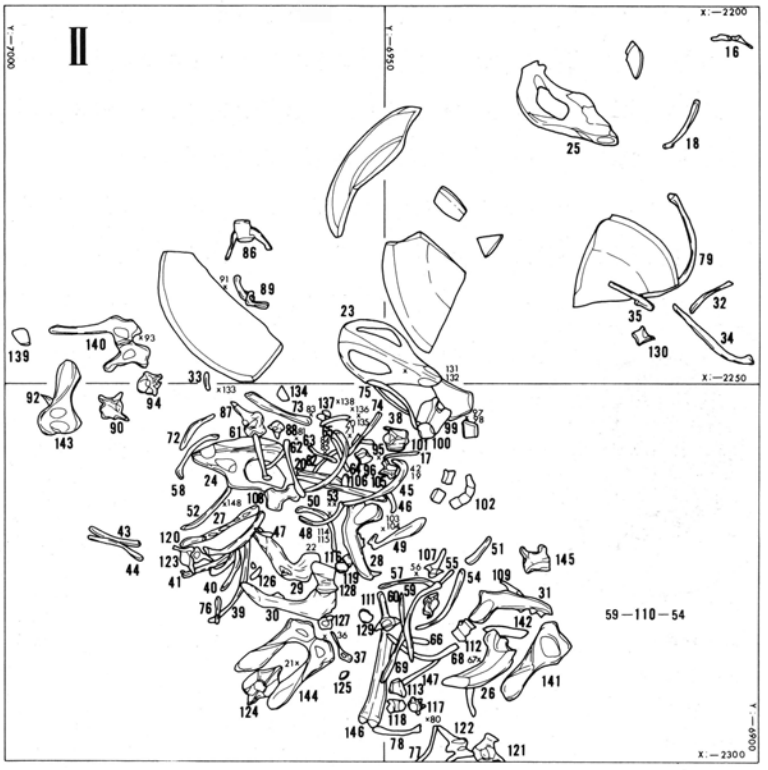


第3図　出土状態図

ヒト　肋　骨　17～22

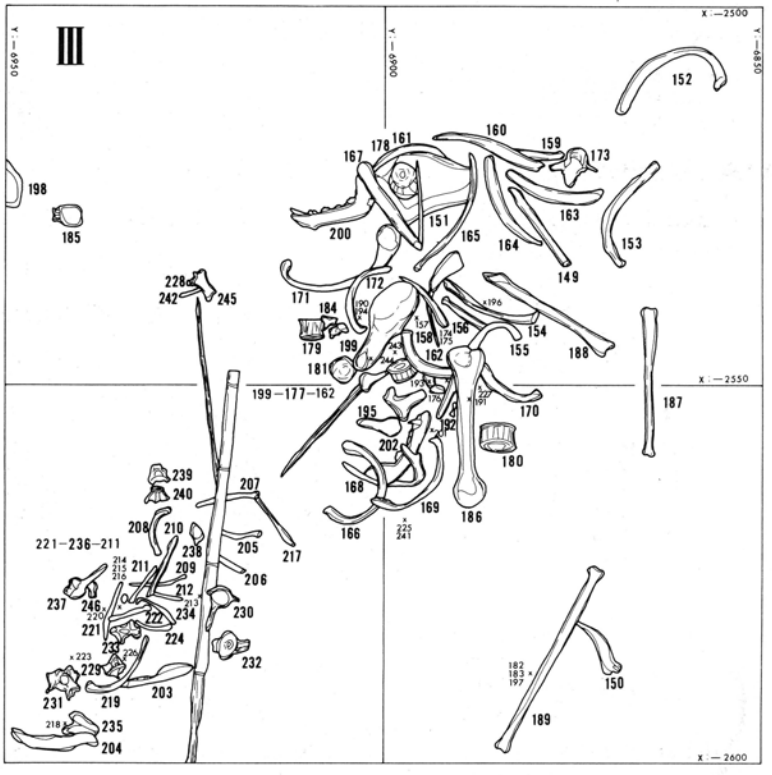
イヌ　頭　骨　23～25
　　下顎骨　26～31
　　肋　骨　32～85
　　椎　骨　86～138
　　寛　骨　139～144
　　仙　骨　145
　　脛　骨　146
　　腓　骨　147
　　歯　　148

カメ　　16



ヒト　鎖　骨　149・150
　　肩甲骨　151
　　肋　骨　152～172
　　椎　骨　173～183
　　胸　骨　184
　　上腕骨　185・186
　　橈　骨　187
　　尺　骨　188
　　腓　骨　189
　　指　骨　190～192
　　足根骨　193～195
　　趾　骨　196
　　歯　　197

イヌ　頭　骨　198・199
　　下顎骨　200～204
　　肋　骨　205～228
　　椎　骨　229～242
　　寛　骨　243・244
　　仙　骨　245
　　歯　　246



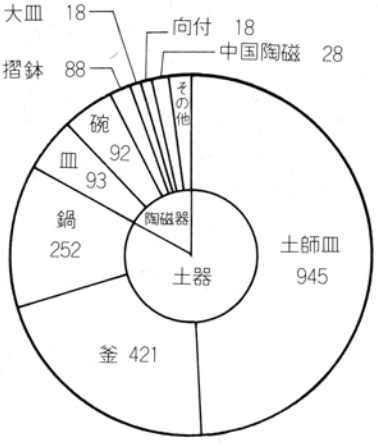
第4図　出土状態図

2．骨以外の遺物

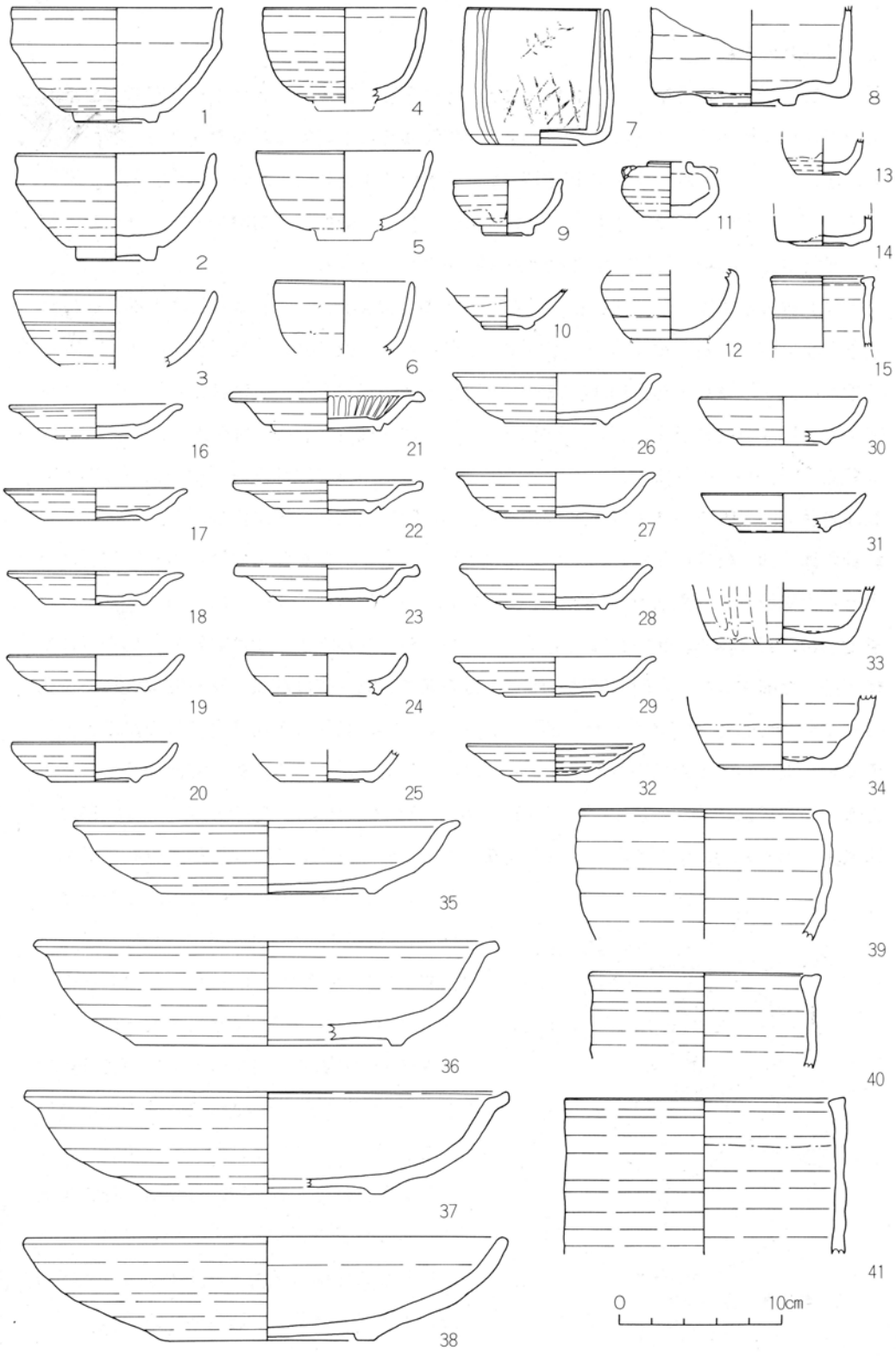
ＳＤ11の下層粘質土中からの出土遺物は、その種類、量ともにきわめて豊富で、なかでも土師質土器が多く、やきものの中では全体の80％を占る。陶磁器類では瀬戸・美濃産の碗、皿、向付、茶入れ、摺鉢や中国陶磁が、土器類では土師質土器の皿、鍋、釜、土製犬、土鈴などが、木製品類では漆器の椀、箸、折敷、杓子、柄杓、曲物桶、下駄、数珠玉、編笠、呪符木簡、柿経、堆黒屈輪文香合蓋などが出土している。

１は鉄釉天目茶碗、２は長石釉天目茶碗、３は灰釉丸碗、４、５は長石釉丸碗、６は鉄絵を下絵に描いた長石釉丸碗、７は一面ごとに鉄絵を下絵に描いた長石釉角向付、８は長石釉茶碗、９は鉄釉小碗、10は灰釉小碗、11は小型の灰釉水注、12は鉄釉水注、13は鉄釉茶入れ、14は長石釉小壺、15は鉄釉香炉、16～20は灰釉皿、21は灰釉菊皿、22、23は灰釉折縁皿、24、25は鉄釉皿、26～31は長石釉皿で、31の内面には鉄絵が下絵に描かれている。32は内面に同心円状の凸帯のある無釉の皿、33、34は鉄釉壺、35は黄瀬戸の鉢、36～38は鉄釉の鉢、39～41は鉄釉水指し、42、43は摺鉢で、これらの瀬戸・美濃産の施釉陶器はいずれも大窯製品で、織部焼の製品は出土していないのである。44～51は土師質土器の鍋、釜で、44、45は羽釜、46～48は三足両耳釜、49～51は内耳鍋で、52は陶製の三足内耳鍋で煤が付いた痕跡はない。53～95は土師質土器の皿で、53～57は耳皿、58～62は底部に穿孔のある手捏小皿で、58では３ケ所の穿孔がある。63～79は底部に糸切り痕の残る皿で、大別すると、大・中・小の三種類があり、中型の中に耳皿が含まれる。80～95は手捏の小皿である。96～101は中国陶磁の染付けで、102～105は土製犬、106は土鈴である。107～109は外面黒漆、内面朱漆の椀で外面に朱漆で鶴などが描かれている。110は内外面とも朱漆の椀であるが、高台内は黒漆で朱漆による文字が見られる。111は黒漆の香合、112は独楽、113は横櫛、115は箸筒で、竹筒の中に114の箸が二膳分はいった状態で出土したが欠損のため上端部は不明である。116は汁杓子、117は飯杓子、118は子供用連歯下駄、119は曲物桶、120は堆黒屈輪文香合蓋で、黒、朱、黒、朱、黒漆の塗り重ねである。121～129は呪符木簡で、この他に柿経の断簡なども出土している。

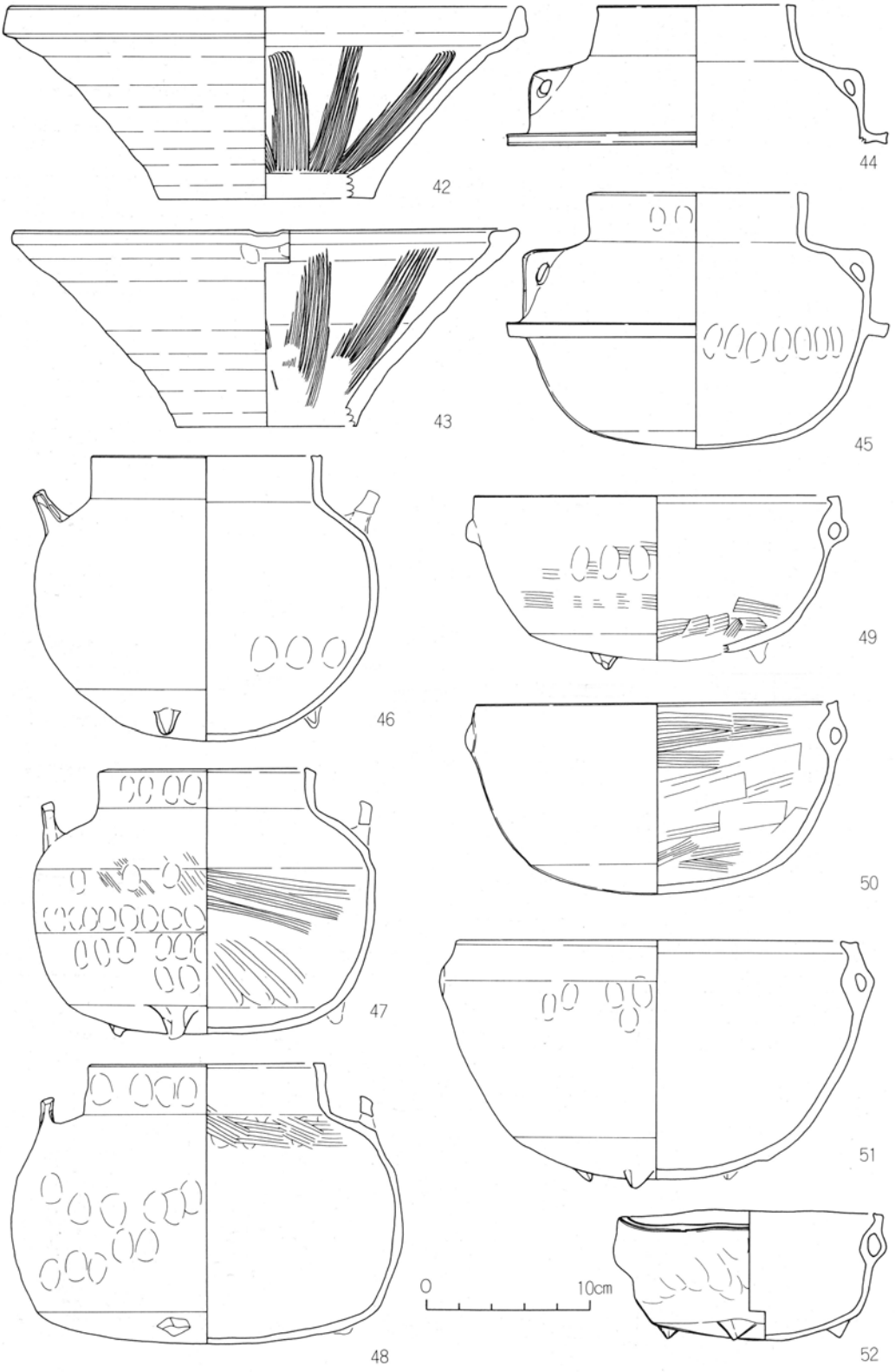
これらの遺物は16世紀の後半から17世紀初頭にかけての良好な一括資料である。



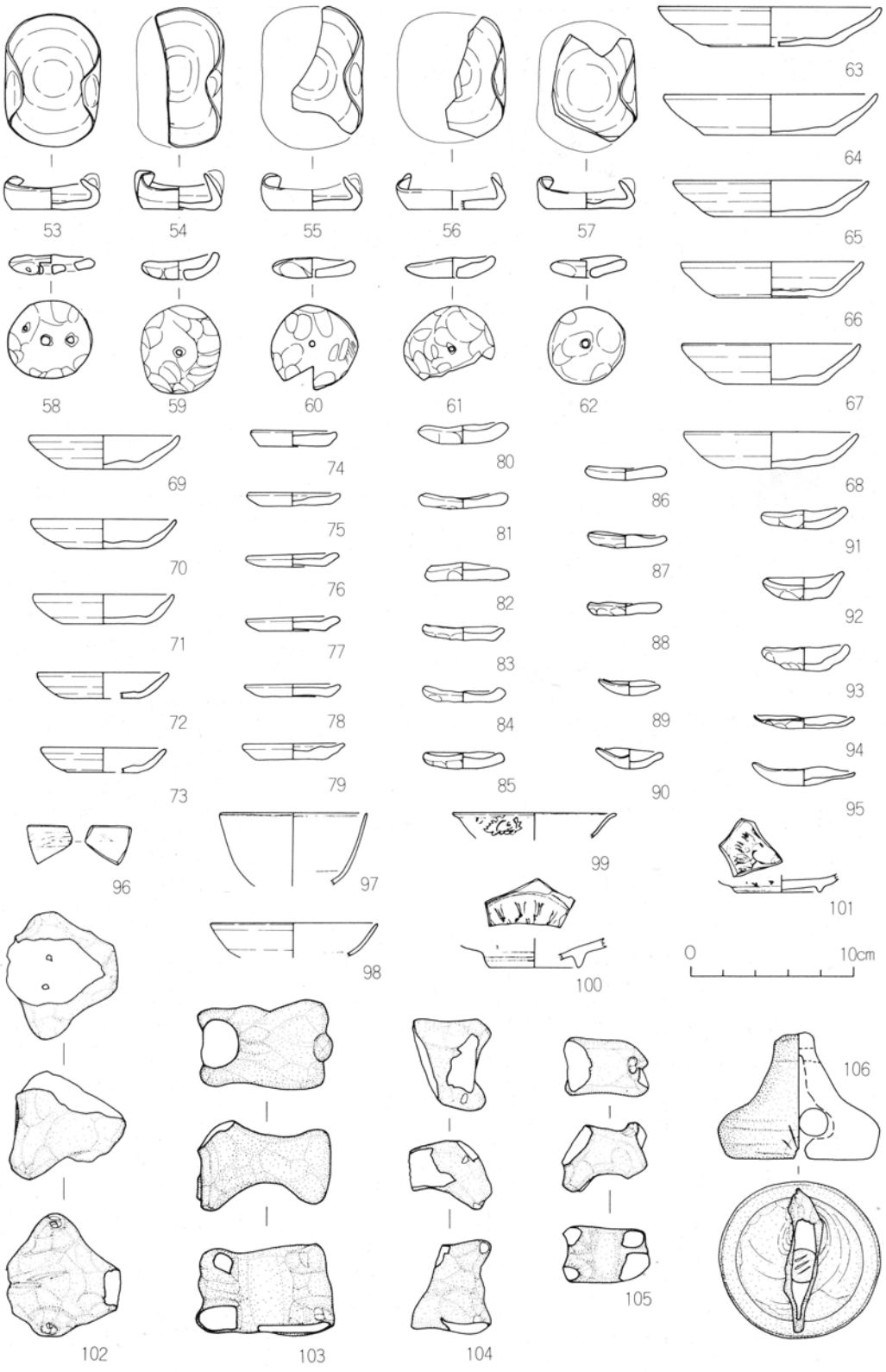
第２表　器種別構成
（数字は破片数を表す）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
10cm

第５図　遺物実測図



第６図　遺物実測図



第7図　遺物実測図(102～106は1/2)



第８図　遺物実測図（120は1/2）

Ⅱ　出土した人骨および犬骨

1．人骨について

以下に述べる人骨の通し番号は、この報告書の記載の便宜上つけられたものであり、採取された順に付されたオリジナル番号は括弧内に記しておいた。後日、採取リストと照合する必要を生じた際に、混乱を招かないようにとの配慮からである（但し、採取リストについては、スペースの関係上、割愛した）。

第１号人骨（No.17、No.22）

熟年女性。出土時には解剖学的配列のあとを留めておらず、東西３ｍ、南北６ｍの範囲内で散乱状態で出土したため、同一個体のものかどうか同定できなかった。しかしクリーニングした結果、これらはすべて同一個体であることが判明し、No.22の下顎骨もNo.17の頭骨の１部であることがわかった。その結果ほぼ全身骨格が揃ったことになり、骨質の保存状態も良好である。

歯式は右 $\frac{M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ \times\ \times\ \times}{M_3\ M_2\ M_1\ \times\ \times\ \times\ \times}$ | $\frac{\times\ I_2\ P_1\ \times\ M_1\ M_2\ M_3}{\times\ \times\ \times\ \times\ M_1\ M_2\ M_3}$ 左で、×印は死後脱落し消失した歯を意味する。脱落したあとの歯槽には、泥土がぎっしり詰まっており、投棄時にすでに脱落していた可能性がある。残存している歯は、すべて軽度の磨耗が認められるが、象牙質にまで達していない。

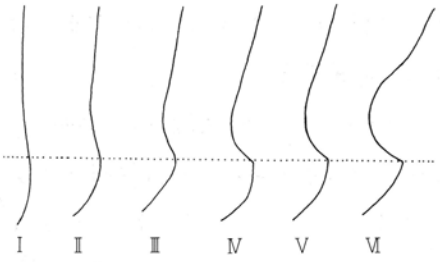
頭骨上面観はSergiの分類によると「菱形」に属し、頭示数は76.57で、長頭に近い中頭。Pterionの部分には、左右ともにかなりよく発達したOs epiptericumが存在する。

前頭部は丸味があり、前頭結節の発達が強度ではないが認められる。眉上弓の発達は弱く、Broca　Ⅱ型（第９図a）。

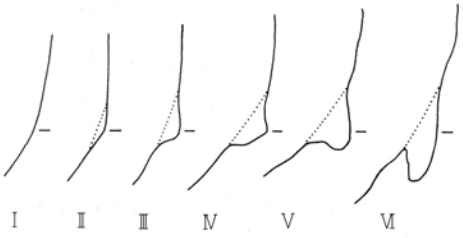
顔面部全体は頬骨弓の側方への張り出しもつよくはなく、きゃ奢で小柄な印象を受けるが、眼窩下部のくぼみ（Fossa suborbitalis）はめだち、鼻背部はかなり隆起がつよく、全体として彫りの深い顔貌の持主だったらしい。古墳時代や中世に多く見られる扁平な顔つきのなかでは、かなりめだったものと思われる（図版Ⅱ、１a）。

Kollmann の顔示数81.22、上顔示数49.27にもみられるように、低顔である。しかし低顔ではあるが顔幅が小さいために、眼窩高が大きい印象を受け、それは眼窩示数90.37にも反映しており、高眼窩 hypsikonch に属する。眼窩軸は外側に向かって中程度に下がっているが、これも顔幅の発達がよわいことと関係があると思われる（図版Ⅱ、１b）。

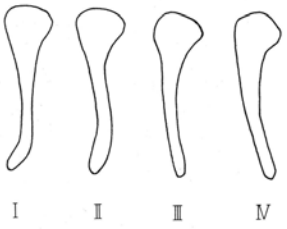
鼻部は鼻示数49.19で中鼻 mesorrhin に属する。鼻背部は側面観では凹から凸へとS状カーブを示し、Rhinion はNasospinale よりもかなりつよく前突しており、この時代の女性では稀有なほど、鼻すじが通っていて、隆起もつよかったと考えられる（図版Ⅱ、１a）。



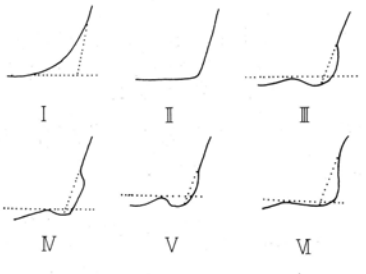
a．眉上弓の発達度 (Broca)



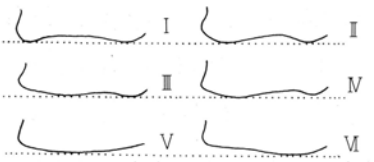
b．外後頭結節の発達度 (Broca)



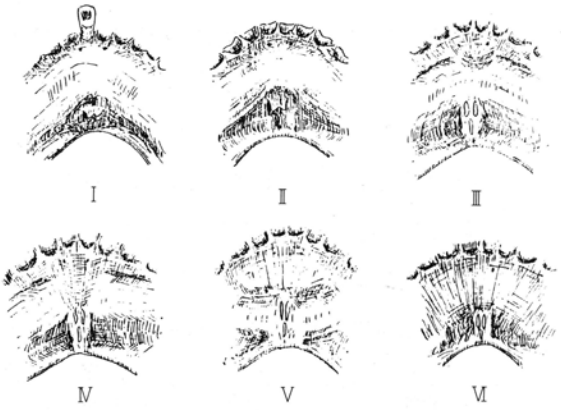
c　下顎枝後縁部の形態 (H. E. Schultz)



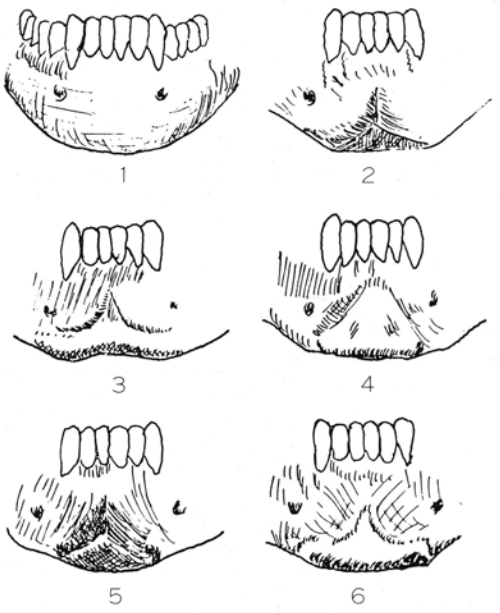
d．下顎角部の形態 (H. E. Schultz)



e　下顎下縁部の形態 (Keiter)



f．下顎前内側面の形態 (Ehara)



g．オトガイ三角の形態 (H. E. Schultz)

第９図　頭骨各形質の分類規準

乳様突起は中程度の発達で、外耳孔は卵円形である。

後頭部では、とくに後頭平面 Planum occipitale の膨隆がめだつが、外後頭結節そのものは、さほどつよくはなく、Broca Ⅱ型を示す（第９図b)。

下顎骨は全体として小さい印象を受け、とくにThomsonの下顎示数は64.92でdolicho-stenomandibular。下顎枝後縁部はＳ状カーブを示し、H. E. Schultz Ⅱ型（第９図c)。下顎角部では下顎前切痕および下顎上切痕がよく発達し、Schultz Ⅲ型（第９図d)。下顎骨下縁部では Torus marginalis がよく発達しており、Keiter Ⅲ型（第９図e)。E-minentia Lateralis の発達もいちじるしい。下顎前部の側面観では切歯歯槽部の前突がつよい。オトガイ三角Mentum trigonumはSchultz３型（第９図g)。下顎前内側面では、切歯歯槽部が前上方に向くため、Torus transversus superiorが存在するかのようにみえる。切歯が脱落しているため、わかりにくいが歯槽突顎性がある程度発達していたと思われる、Ehara Ⅰ型（第９図f)。

大腿骨最大長（374㎜）に基き、Pearson 推定式で身長を計算すると145.59㎝で、現代近畿人女性の平均約 146㎝と比較して、あまり違いが認められない。

第３表 第１号人骨（頭骨）計測値

1	g-op	175.0	40	ba-pr	96.5	61	上顎歯槽幅	60.9
2	n-ba	95.5	43	fmt-fmt	101.8	62	ol-sta	40.5
8	eu-eu	134.0	45	zy-zy	130.5	63	上口蓋幅	27.1
	頭示数	76.57	46	zm-zm	98.1	65	kdl-kdl	110.9
9	ft-ft	86.9	47	n-gn	106.0	66	go-go	89.7
11	au-au	120.6		顔示数47／45	81.22	68	下顎長	72.0
12	ast-ast	106.4	48	n-pr	64.3		下顎示数68／65	59.96
17	ba-b	128.0		上顎示数48／45	49.27	69	id-gn	26.4
23	頭周囲	495.0	50	mf-mf	23.9	70	go-kond	59.3
25	n-o 弧	352.0	51	mf-ek	37.4	71	下顎枝幅	35.8
26	n-b 弧	125.0	52	眼窩高	33.8	72	下顎枝角	115.0°
27	b-l 弧	125.0		眼窩示数52／51	90.37			
28	l-b 弧	102.0	54	鼻 幅	24.4			
29	n-b 弦	109.0	55	n-ns	49.6			
30	b-l 弦	110.9	60	pr-alv	52.0			
31	l-o 弦	86.3						

第２号人骨（No.１）

熟年女性。顔面頭蓋部は破損消失し、頭蓋底部をともなう脳頭蓋部(Calvaria)のみ残存。

骨質保存度はふつう。矢状縫合の閉鎖はかなり進行しており、熟年と推定。

上面観では頭蓋の輪郭はかなり歪んでいるが、これは生前からのものと思われる。(図版Ⅱ、２c)。頭示数74.58で長頭である。

前頭部は丸味を帯びて膨隆しており(図版Ⅱ、２a)、前頭結節がある程度認められる。頭頂結節はきわめて顕著である。眉上弓の発達はよわく、Broca Ⅱ型（第９図a)。

乳様突起は小さく、外耳孔は卵円形である。

後頭部とくに後頭平面の膨隆がつよく、丸味があり、外後頭結節はBroca Ⅲ型(第９図、b）に属する。

第４表　第２号人骨（頭骨）計測値

1　g - op	177.0	11　au - au	110.0	26　n - b　弧	121.0
2　n - ba	94.4	12　ast - ast	109.1	27　b - l　弧	133.5
8　eu - eu	132.0	17　ba - b	125.5	28　l - o　弧	105.5
頭示数	74.58	23　頭周囲	491.0	29　n - b　弧	105.1
9　ft - ft	94.9	25　n - o　弧	360.0	30　b - l　弦	120.5
				31　l - o　弦	89.2

第３号人骨（No.９）

脳頭蓋部（頭蓋底は欠如）と左顔面の１部からなるが、破損と変形がいちじるしく、骨質も脆くなっている（図版Ⅱ、３）。縫合閉鎖はかなり進行しており、熟年もしくは老年女性と推定される。すぐ傍から下顎骨（第４号人骨、後述）が出土しているが別個体。両者とも骨化したものが投棄されたものと考えると辻褄が合う。

前頭部は膨隆し、丸味がつよく、前頭結節が認められる。眉上部の発達はほとんどみられない。頭頂結節の発達はあまりつよくない。乳様突起は小さく、外耳孔は卵円形を呈する。

顔面部では左眼窩の部分が残存しており、それによると眼窩軸は外側に下がっていることがわかる。左鼻部の１部が残っており、第１号人骨と同じように、鼻根部の切れ込みはつよくなく扁平に近いが、鼻背部はかなり隆起していたと思われる。

第４号人骨（No.２）

下顎骨。第３号人骨（頭骨）のすぐ傍から出土したが、いちじるしく推定年令を異にしており、別個体と見做すべきであろう。

この下顎骨では、左右の下顎枝は欠如している。下顎体の形状から、多分成人女性のものと思われる（図版Ⅱ、4a、b)。

左第３大臼歯部が残存しているが、第３大臼歯は歯槽内に埋没しており、第２大臼歯にさえぎられて萌出できなかった可能性がある（図版Ⅱ、４c)。附近から上顎左右中切歯および右上顎犬歯が遊離して出土しているが、磨耗があまりなく、第２号人骨と同一個体のものの可能性もある。

下顎下縁部ではTorus marginalis がよく発達しており、側面観ではKeiter Ⅲ型に属する（第９図、e)。オトガイ三角Mentum trigonum の形態はSchultz ６型（第９図g)。下顎体前内面部ではPars incisiva がよく発達しており、Ehara Ⅵ型（第９図f)。

第５号人骨（No.10）

頭蓋底部の大後頭孔の左側が破損欠如しているが、顔面部はすべて残っている。乳歯列は完成しているが、永久歯は未萌出で、５～６才の幼児。性不明（図版Ⅱ、５a、b、c)。

いちじるしく長頭で、頭示数は約72.6。頭頂結節はよく発達しており、後頭部は紡錘

状に後方に突出。俗にいう、いちじるしい「才槌頭」である。

第６号人骨（No.100）

ＳＤ11の西側境界附近で、他の人骨や犬骨とはかなり離れて、寛骨の１部と関節した状態で、左大腿骨１本だけが出土した（図版Ⅱ、６）。

その骨体部後面には、きわめて鋭利な刃物で、近位部から遠位部にかけて外側上方から内側下方へと、斜めに約５cmの等間隔で、しかも平行に深い切り込みがつけられており、最遠位部の４ケ所目の位置で大腿骨は完全に、しかも鋭利に切断されている。

この部分は人体中でも筋肉の被覆のもっとも肥厚した部分であり、また切り込み個所がはつり取られていることから、死体もしくは死後骨化したものを損傷したと考えられる。その意味するところは不明である。

2．犬骨について

犬骨は人骨と重複するかたちで、粒土の細かいシルト状土壌中から出土。

頭骨・寛骨のほかに、多数の肋骨や椎骨が群塊状態で発見されたが、四肢の長管骨で見るかぎり、若令個体はきわめて少い。肩甲骨は皆無である。しかも解剖学的配列を示さないので、人骨の場合と同じように、すでに骨化したものがまとめて投棄されたらしい。

クリーニング後、確認したところでは、頭骨と下顎骨は15体分あるが、そのうち12対を対応させることができた。寛骨は13個体分が認められている。綜合して少なくとも18個体分と考えられるが、頭骨と寛骨の対応は不可能で、それら以外の個体が含まれている可能性も排除できない。

性別はオス３個体、メス６個体、オスらしきもの２個体、不明２個体。

今回出土した犬骨には、かなり大きな個体変異が認められたことは、特筆に値しよう。

なおこれらの個々の計測データは、「朝日西遺跡出土の犬骨について」の題名のもとに、人類学雑誌94巻３号に掲載されることになっているので、詳細はそれにゆずることにしたい。

3．結　語

すでに述べてきた人骨や犬骨が、「清須越」に際して、まとめて投棄されたものらしいことは明らかである。

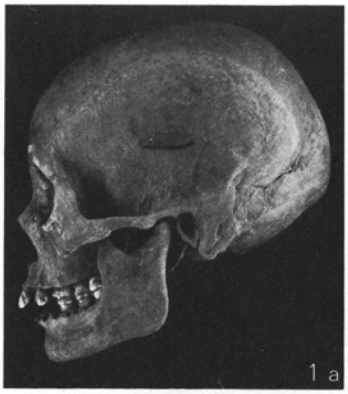
多数まとまって出土した犬骨にかなり大きな個体的変異が認められるのは、すでにこの時期に、在来犬に混って外来犬が持ち込まれた記録もあるので、興味がある。

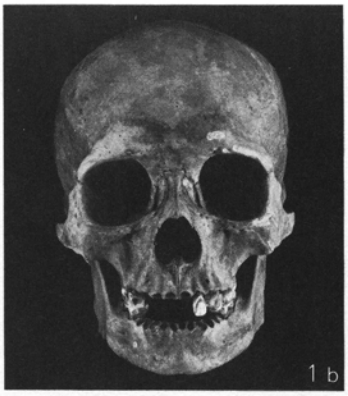
しかし、これらの犬骨が大量にまとめて投棄された理由は何か、人骨と混在している理由や、損傷された大腿骨が何を意味するかなど、今後多方面からのアプローチが必要になることだろう。

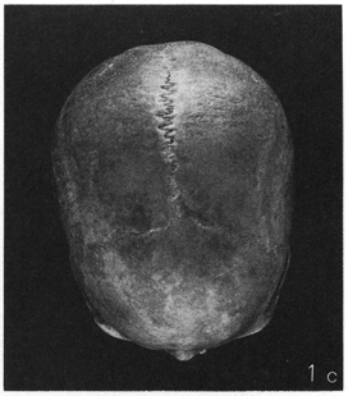
図版Ⅰ　遺物出土状態



図版Ⅱ　人骨

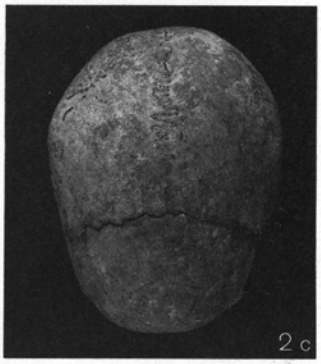

1a


1b

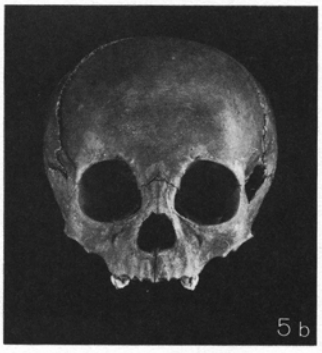

1c

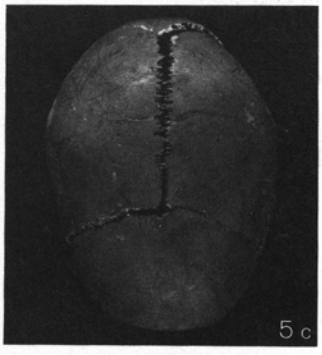

2a

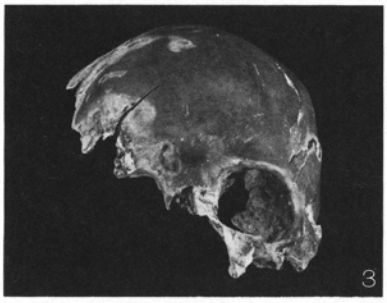

2b

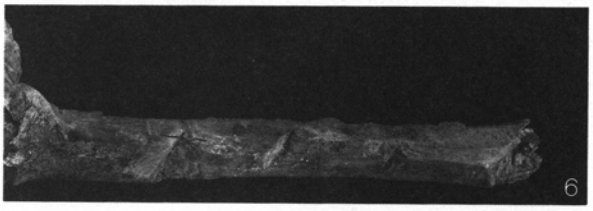

2c


5a

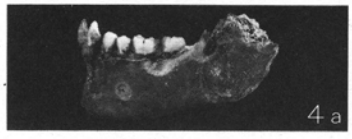

5b

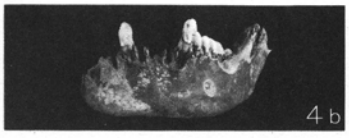

5c

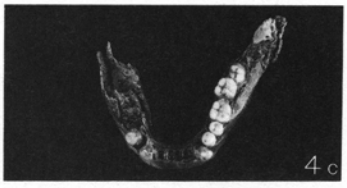

3


6

S＝1：4


4a


4b


4c